

的に知ってもらえるような工夫が必要である。

雑誌『歌劇』を例にあげると、宝塚歌劇はもちろん、音楽、演劇資料としての価値は広く知られているが、初期の頃は坪内逍遙、与謝野晶子、長田幹彦、高安月郊ほか、近代文学を代表する作家の名前がみられたり、丹羽文雄や吉屋信子が小説を連載したりしている。また、戦前に編集に携わっていた平井房人や平林たづ子はオサカ漫画グルッペのメンバーであり、戦後は手塚治虫も漫画を描いている。近代文学や漫画などの分野でも研究対象となりうる資料である。もっと当館の資料を多方面に知ってもらい、活用してもらえよう、今後も情報発信に努めていきたい。

ほかにも資料保存の面では、広報誌などは紙媒体での発行回数がだんだんと減ってきており、現在ではホームページ上での電子情報の提供に変わりつつある。また、その発信方法もホームページだけでなく、TwitterやFacebookなどのソーシャルメディアも普及してきており、多岐にわたる。これらは即時性があり、情報発信の方法としては画期的な手段だと思われるが、容易に書き換えができ、またいつの間にか消去されるものでもある。図書館として、新しく出てくる幅広い情報網をどこまで、どのように収集し保存していくべきか、考えていかなければならない課題である。

池田文庫のこれから

現在、各所より寄贈を受けていた日本各地の劇場の演劇プログラムの整理を順次、進めている。これらの整理が進むにつれ、宝塚歌劇や歌舞伎以外にも文楽、舞踊、新派、新劇、新国劇、喜劇、ミュージカルなど、多彩なジャンルの資料をもつ演劇専門図書館としての価値はさらに高まるであろう。そして、例えばある作品を通して、文学、演劇、映画など、いろいろな分野にわたって、図書、雑誌、プログラム、番付など、当館のあらゆる所蔵資料を横断的に活用してもらえらる機会もさらに増えると考えている。

またコロナ禍により、遠方からの来館が難しくなったり、閲覧時間の制限もあつたりと、利用者にとって不便なことも多いが、データベースや所

蔵資料の登録、雑誌記事索引の入力などをさらに進めていき、来館が難しくても阪急文化アーカイブズで当館の資料を楽しめたり、来館時には制限時間内に目的の資料にたどり着くための助けができるよう、日々、職員はいろいろな工夫を加え、考えをめぐらしながら仕事に励んでいきたい。小林一三の思いが詰まった図書館、池田文庫の発展のために。

<公式ウェブサイト>

- 公益財団法人阪急文化財団
https://www.hankyu-bunka.or.jp/
 - 公益財団法人阪急文化財団 池田文庫
https://www.hankyu-bunka.or.jp/ikedabunko/
 - 蔵書検索
https://ikedabunko.opac.jp/opac/Top
 - 阪急文化アーカイブズ
https://www.hankyu-bunka.or.jp/archive/
- ※コロナ感染拡大防止のため、利用方法などが変更になる場合があるので、来館前には公式ウェブサイトを確認のこと。

<注>

- 1) 図書館のエスプリ. 宝塚文芸図書館月報. vol. 2, no. 2, 1937, p. 34.
- 2) 小林一三. 小林一三日記第二巻. 阪急電鉄. 1991, p. 280.
- 3) 小林一三. 日本一の文化都市に(私が池田市長に当選したならば). 阪神毎朝新聞. no. 4269 (附録), 1947-02-02.
- 4) 国立映画アーカイブ, 映像産業振興機構編. 全国映画資料館録 2020. 文化庁, 国立アーカイブ. 2021, 71p.

(2021.11.18 受理)

特集★私設・私立の図書館

グリーンケアライブラリー「ひこばえ」

★かなしみに寄り添い、かなしみをほぐす居場所

本郷 由美子／吉水 岳彦
桑島 寛之／二瓶 聖卓／高澤 修子

1 はじめに——「ひこばえ」開設の経緯

本稿では、2020年に開設したグリーンケアライブラリー「ひこばえ」について説明していくにあたり、その開設の経緯、開設される場について、グリーンケアライブラリーの現況、グリーンケアライブラリーの特徴と具体的な効果や存在意義、展望と課題を順に述べていく。はじめに、グリーンケアライブラリー「ひこばえ」を何ゆえに開設する必要があったのか、その開設の必要性と開設に至る経緯について紹介する。

2001年、下町グリーンサポート響和国（以下、「響和国」と略す）代表の本郷由美子は、犯罪によって最愛の家族を奪われるという、人生を変えるほどの大きな喪失を体験し、深い悲嘆と絶望を経験した。

そんな本郷を気づかう友人や知人のなかには、その心の痛みを慮って選んだ絵本や書籍を贈ってくれる者もいた。しかし、大きな喪失を体験してグリーフの状態にある人の多くが経験するのと同じく¹⁾、本郷自身も本や新聞を手にとって文章が頭に入ってこない状態であった。そのため、とても絵本を読む気持ちにはなれず、1ページめ

くっても、その先を読み進めることができなかった。それでも、絵本を手にするを繰り返していくうちに、次第に、ほんやりと絵や文字を眺めていると気持ちがやわらいでいくのを感じるようになった。やがて、孤独もやわらいでいき、絵の質感や色彩、文字の字体や表現がそのときの心に響き、自己の内面から深い対話が紡がれていった。

そして、大きな喪失によってもたらされたかなしみはゆっくりとほぐされてゆき、心も癒され、前を向くきっかけを見出し、生きる力を得ていたのである。すなわち、絶望している自身の心に、絵本等の書籍が静かに寄り添ってくれるという経験をしたのである。

2003年以降、本郷が事件・事故・災害・自死・障がい・病気等、さまざまな喪失により悲嘆を抱える人々に対してグリーンケアを行うなかで、「この絵本や書籍に救われた」との話を幾度も聴かせてもらった。そのことで、絵本が自己のかなしみに寄り添ってくれるものであるという体験が、自分一人だけの特殊なものではなく、多くの人にも重なる事象であることを学ぶことになった。

さらに、本郷がケアに関する学習を続けるうちに、この体験が、いわゆるビプリオセラピーという、書籍を媒介にした療法に通じるものであることを知った。ビプリオセラピーとは、読書によって、読者の内面に「同一視と投影」「カタルシス」「洞察と統合」がもたらされることで、自己解決力や癒しを促進する効果を得るというものであ

ほんごう ゆみこ、よしみず がくげん、くわしま ひろゆき、
にへい せいたく、たかざわ ひさこ

：下町グリーンサポート響和国

キーワード：グリーンケアライブラリー、「ひこばえ」、山谷、
光照院、こども種楽堂

る²⁾。

極めて実際的な療法であり、10年ほど前にイギリスで行われた調査によると、ストレスレベルを68%も下げる読書は、音楽鑑賞やお茶を飲む等、さまざまなリラックス法のなかでもっとも効果的な方法であるとの結果が出されている。また、読書が人間の心に与える神秘的な力は、プロマイオス王朝時代に創建されたアレキサンドリア図書館の門には「魂の癒しの場所」と刻まれていたことから、古代からすでに認識されていたことがわかる³⁾。

このように、歴史的にも、科学的にも、人々の心の痛みや不安の軽減に絵本や本を手取ることの大切さを、本郷は自己の喪失体験以後、さまざまな形で学ぶことになったのである。

以上のように、本郷は自己の体験やグリーンケア活動によって得られた知見、さらにはケアに関するさまざまな学習を通じて、絵本や書籍をゆったりと読むことのできる居場所が、グリーンを抱えた人々にとって重要であるとの考えに至る。そして、喪失にともなう悲嘆等の多様な感情に寄り添う図書を集め、心や魂を癒すことができる空間「グリーンケアライブラリー」の必要性を強く認識し、その開設を決意したのである。

これ以後、本郷はグリーンに関する絵本や本のリストを作成し、募金活動を行い、全国各地をまわって講演した際の謝礼金の一部を貯金して、その開設に必要な資金と知識を集め続けた。2014年、浅草山谷地域で路上生活者支援を行うのと同時に、地域の子どもの居場所づくりを考え、「こども極楽堂」を建設しようと企画していた同地域にある寺院の僧侶吉水岳彦と出会い、「グリーンケアライブラリー」実現のための具体的な話し合いを行うことになる。同時に、同ライブラリー開設を準備しているとの情報が、喪失体験後に同様のニーズをもつ人たちの間に広がり、寄付金、絵本や本、施設内備品の寄贈が集まった。

2019年、「こども極楽堂」内にライブラリー開設を決定するも、響和国メンバー各自の活動や仕事の忙しさから、なかなか実現に至らなかった。また、新型コロナウイルスの感染拡大当初は身動きがとれず、開設のための準備はより滞った。と

ころが、コロナ禍で心を病む人や、自らのちを断つ人の増加の報を受け、響和国メンバーによって準備は急ピッチで進められた。そして、当初予定していたよりも半年遅くなったものの、新型コロナウイルス感染症対策を講じたうえで2020年11月に設立記念ミニ講演会を開催し、ついにグリーンケアライブラリー「ひこばえ」を開館することができたのである。



2 浅草山谷光照院と「こども極楽堂」

(1) 光照院の歴史と子ども支援

グリーンケアライブラリー「ひこばえ」が開設されたのは、吉水が住職を務める浅草山谷地域にある浄土宗寺院の敷地に建つ「こども極楽堂」のなかである。次に、開設の場である光照院とこども極楽堂の歴史や特性について紹介する。

浅草山谷にある浄土宗光照院は、江戸期正保3(1646)年に創建された。関東大震災や第二次世界大戦、キティ台風等によって、堂宇は何度も倒壊・焼失するも、本尊阿弥陀三尊像のみは守られ、その本尊をもとに繰り返し再建されてきた。

戦後、光照院第十八世住職吉水現祐は、本堂を再建するよりも早く小さな地藏堂を建てた。理由は、子どもたちが戦争で喪った父母や兄弟、友人など、大切な人を想って手をあわせる場所がまず必要だと考えたからである。戦前から光照院で子ども会活動を行ってきた現祐にとって、子どもたちの心の痛みをわかちあえる場所と教育の場、遊びの場の三つは戦後復興のために欠かせないものであったにちがいない。

戦後すぐから光照院内に「明照こぼと子ども会」の活動を創始して、多くの子どもたちの居場所をつくり、やがて大人や大学生たちと子どもたちが触れ合い、学び合う場所になっていった。加えて、台東区議会議員となった現祐は、山谷の労働者たちと地域の子どもの双方がともに生きやすい環境づくりのために尽力している。その子ども会活動は、第十九世住職吉水裕光に引き継がれ、活動はさらに大きく展開する。ところが残念なことに、少子高齢化の影響から地域の子どもの

減少し、およそ1980年代末には子ども会活動が行われなくなってしまった。

(2) こども極楽堂の建立と活動

2008年のリーマンショック以降、日本でも貧困が社会の大きな問題となり、家庭の貧困は、子どもたちの教育や生活に格差を生み、虐待やネグレクト等の問題を増大させることになった。安心や安全が脅かされる子どもたちが増えてきて、再びどんな家庭の子どもたちも安心して集まることができる場所が社会から求められるようになる。

2014年ころ、台東区で子育て支援を行っている「NPO法人台東区の子育てを支援合うネットワーク(通称:たいとこネット)」より、子どもの無償学習支援の場所を提供してほしいという相談が光照院に寄せられた。また、それと同じころ、光照院本堂裏に住む檀信徒から、建物の寄進に関する話を頂戴した。当時の住職裕光も副住職だった吉水岳彦も、これは仏縁にちがいないと感じ、寄進された建物を耐震改修して子どもの居場所をつくることを決意する。

また岳彦は、光照院を拠点として「ひとさじの会」というホームレス状態の人々の支援活動を行っていて、その予防的な活動とは、子ども時代の経済的、人間関係的、教育的な貧困に向き合うことではないかと考えていた時期でもあった。そのため、あらゆる喪失を経験している子どもたちが立ち寄ることのできる、安全で安心な居場所の支援を、再び光照院が行う必要があると考えるに至ったのである。

2017年10月、光照院本堂裏に「こども極楽堂」が落慶し、以後、「たいとこネット」による無償学習支援と子ども食堂が行われるようになる。続いて、子育て中の母親たちの集いの場の運営等を行っている「ふれるはぐくむ wa-coya」、子どもたちのお楽しみの会を開く「ごくらくこどもクラブ(現あむりた)」、グリーンサポートを行う響和国等、さまざまな団体が、それぞれの特性を活かした活動をこども極楽堂で行うようになっていった。

完成したこども極楽堂という場の最大の特徴は、随所に阿弥陀如来や観音菩薩の絵像や地藏菩

薩の木像などが安置されていて、来館する大人も子どもも、いつでも見守られていると感じられる空間になっている点にある。それは阿弥陀如来の慈光のもと、国籍も人種も金銭の有無も関係なく、学校にも家庭にも居場所のない子どもたちや、心に痛みをもつ人々が、安心して遊び、学び、ただぼんやりとしていてもいい場所になることが願われて設立されたことの証左でもある。

2020年のコロナ禍以降のこども極楽堂では、乳幼児を抱えた母親が集う wa-coya の活動が難しくなり、子ども食堂は「フードパントリー」活動に内容を変更しなければならなくなったが、形を変えながらも複数の団体によって子ども支援の活動が続けられている。

そんななか、先に述べたとおり、グリーンケアライブラリー「ひこばえ」は、コロナ禍になって以後、開設のための準備が急速に進められ、同年11月にお披露目のミニ講演会が行われた。急いで準備したときに考えていたとおり、開館以後、コロナ禍だからこそ苦しい人々にとっても「ひこばえ」は大切な居場所になってきている。そのような状況を鑑みると、本来、あらゆる苦しみを吐露できる場である寺院としての役割を、こども極楽堂や「ひこばえ」が担っているといえるであろう。いまや「ひこばえ」は、光照院にとっても地域にとってもなくてはならない存在になりつつある。



3 グリーンケアライブラリー「ひこばえ」の概要と現況

(1) 「ひこばえ」の概要

①所蔵図書関係

開館当初は400冊でスタートしたが、その後趣旨に賛同する方の寄贈本(持ち込み・郵送)や寄付金による購入本を含め、2021年10月現在で850冊超の在架冊数となっている。内容的には、絵本(グリーン関係書籍や一般的な絵本)が約8割と最も多く、他にグリーンケア関連図書や一般書で構成されている。

②その他

玩具類, 人形(ぬいぐるみ)類, (セルフケア用)カード, 写経セット, お絵かきセット, ミニ紙芝居セット等を用意しており, 今後さらに充実していく予定である。

(2) 利用の概況

①運用方針について

- 毎週日曜日の午後開館しており, 感染防止対策と来館者の重複回避のため1時~3時, 3時~5時と, 利用時間を区分して事前予約(メール)を受けることを基本としている。
- 予約の際に交通手段と「ひこばえ」の運営指針・目的(①グリーフ表出のための時間・空間の提供, ②自らのグリーフと向き合う環境の提供, ③伴走・寄り添いの実施, ④守秘義務の徹底)を来館予定者に伝え, 自らのグリーフと向き合う時間・空間の提供が「ひこばえ」運営の主目的であることを確認している。
- 感染予防対策として, ①重複来館回避, ②入館時の手指消毒・体調確認, ③換気対策, ④手にした絵本の事後消毒等を実施している。

(3) 利用状況(2020年11月~2021年10月)

2020年11月15日の開館記念ミニ講演会から2021年10月までの1年間で, のべ119名の来館者があり(複数回利用を含む), 一人での来館が最も多く, 家族・友人との来館や支援者同行での来館者もある。

(4) 来館者の感想

——「ひこばえ」の「感想ノート」より抜粋

- どのお部屋も心温まるスペースで, 様々なところにグリーフケアの場があることを知り感動しました。
- とてもすてきな空間でした。自分でも気がつかなかった心の内がどんどんあふれてきました。
- 1年半程前に子どもを死産したばかりでどうやって立ち直ればよいか分からない時期があったので, 同じような経験をされた方にこういう場所があることを知っていただけたらいいなあ

「ひこばえ」の利用状況(2020年11月~2021年10月)

来館者	主な内容
利用者	家族(親・子, 配偶者等)や親しい人との死別経験者
施設見学者	グリーフケア活動者(グループ), 活動予定者, 介護・看護関係者
取材関係	大手マスコミ(新聞・TV), ミニコミ(ネット・地域・専門誌)

と思いました。

- 絵本に囲まれた胎内のような小さなお部屋は, とても落ち着きました。
- 台東区という地域に必要なものなのだなあ, としみじみ感じすっかりくつろがせていただきました。
- 自分に向き合い, 「そのままいいんだよ」と言ってもらえたような, とても良い時間を過ごさせていただきました。
- 33年前に父を亡くし, その1年後母を亡くし, 自分が生きていくだけで精一杯。自分に対して許しが出せなかったのかもかもしれません。今日やっと自分を許せて, そして長かった闘いが終わり, そして何か新しい一歩が出せる予感があります。
- 自分のグリーフに目を向ける時間がどうしてもとれておらず, 心の奥底にたまったものがなんだかすっきりしました。絵本の中の「キミならできるよ」という言葉にまた涙があふれて, 「できるかもしれない」と思いました。
- 本日は素敵な空間で, 日常から解放されて, 自分の感情と向き合う時間を過ごせました。
- そのまま, 自分が想っていること, 感じたことに正直でいられる場所, 無理もしなくていい, そんな場所ほどどんな状況にある人にも必要なんじゃないでしょうか? 本当に「こういう場所があれば……」という, やすらげる場所です。

(5) 1年間の活動を振り返って

コロナ禍のなかでの開館・運用となったが, こうした時期であればこそ, 喪失体験やグリーフを抱えた方々のご要望・ご利用が多かったと思われ

る。実際, 「ひこばえ」の空間やここで過ごす時間に癒やされた, とする感想が最も多かった。絵本自体のもつ効能や主催・運営者による設営の効果もあるが, 開館に至る過程における協力者や寄贈本・寄付金等の提供をいただいた支援者のさまざまな想いが反映された「場がもたらす効果」が大きいものと考えられる。

また, 親しい方との死別を中心とした喪失体験・グリーフを抱える利用者からは, 「日常空間から離れて絵本などに触れ, 自分自身と向き合うことができた」とする感想が多く寄せられた。総じて, 今後さらに充実させるべき課題はあるものの, 設立趣意である「グリーフ表出の場の提供」という目標に向けては, 小さいながらも着実な第一歩を踏み出すことができたものと考えている。

4 グリーフケアライブラリーの特徴と意義

次に, グリーフケアライブラリー「ひこばえ」という場の三つの特徴を述べたうえで, そのような場があることの意義について述べていく。

(1) 空間自体がグリーフケアの場

蔵書のジャンルは, 病氣・事件・事故・災害・戦争等による死別に特化したものだけではなく, 家族や友人との離別や闘病, 夢や希望の喪失等を含めた, 幅広いグリーフに関連する絵本や書籍, 誰もが知っている昔話の絵本, SDGs 関連の本, 障がいのある人も楽しめる「LLブック」や点字の絵本等, その種別は多岐にわたる。

グリーフは, 誰もが経験する自然な反応であるがゆえに, 人の数ほど多種多様なものでもある。また, 喪失体験者のニーズには, 「同じような体験をした人を知りたい」「いろいろ喪失体験者の声を参考に聞きたい」「どうやって喪失と向き合っているのかヒントが欲しい」等, さまざまなものがある。それでも, グリーフに関する絵本についての研究成果や, 寄贈してくださった多くの人の慈愛のおかげもあり, 上記のように幅広いグリーフに関する蔵書がそろっているため, 「ひこばえ」の小さな空間だけですべて対応できるようになっている。

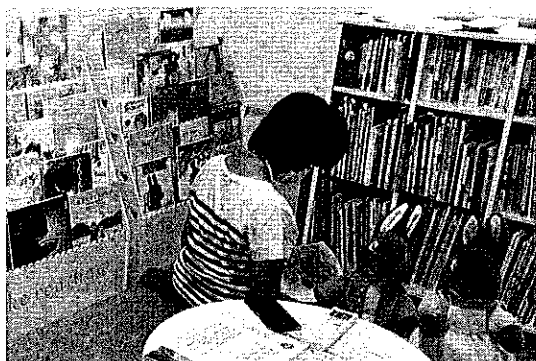


「こども極楽堂」内に開設された「ひこばえ」の館内。
ぬいぐるみやビーズクッションなども置かれている

さらに, 「ひこばえ」の室内の装飾は, 本棚以外, ほぼすべて「かなしみ」を通してつながった人々から寄贈していただいた「愛しみの結晶」である⁴⁾。それゆえ, 「ひこばえ」室内の空間には, 贈り主の願いや想い, 「いのち」に対する愛情が溶け込み, その空間そのものが, 訪れる人の「かなしみ」をやさしく包み, ありのまま(being)を大切に, そっと寄り添う伴走者の役割を担っているかのようなのである。「ひこばえ」利用者の感想に「この空間にいてささまざまな人の気持ちに思いを馳せられる」「自分でも気づかなかった気持ちが, 心のうちに溢れてきました」等と述べられているのは, そのように自己存在を大切に包み込んでもらった体験によるものであろうと考えられる。幅広い蔵書と慈愛の空気あふれる空間そのものが, グリーフケアを促すものになっていることがうかがい知れる。

(2) 心のままにいられて, 心をゆるめて感情表出ができる場

「ひこばえ」室内のソファに座り静かに絵本を読む人, 床に寝転ぶ人, ぬいぐるみを抱きしめ落涙する人, ぼんやりと室内を眺める人, 絵を描く人, 壁の絵に語りかける人, サンドバッグにやりきれぬ感情をぶつける人, スタッフにかなしみを語る人, 静かに写経や写仏をする人等⁵⁾, 実に多様な利用の在り方を目にする。時には, 複数で利用する方々の楽しそうな笑い声が響いてくることもある。



絵本を読む人をはじめ、人それぞれ自由に過ごす。
床に寝転ぶ人や、ぼんやりと室内を眺める人も……

ただ日々を生きているだけでも、ともにいる人や場所によって、実に多くの役割を担って生きることになる。自分から望んでその役割を担うこともあるが、その役割を担っているとき、周囲の人の手前、言葉や態度で表せない感情もいろいろある。「ひこばえ」で過ごすときの姿勢は、大きなビーズクッションに大の字になって寝ていてもいいし、どのような態度でもかまわないと利用者には伝えている。現在は予約制であることも手伝って、他者の目を感じることもない。そのため、大人も子どもも日常の役割を離れ、ありのまま、気持ちのおもむくまま自由に過ごしやすい場になっている。そのようなゆるやかな環境であればこそ感情を表出しやすく、自分の心のうちにあるあらゆる感情をだすことで、自己の心を調べたり、緊張や不安をやわらげたりしてもらえるようにしている。

(3) 自己のうちに芽生えた 「ひこばえ」に気づくことができる場

そもそもライブラリーの名前になっている「ひこばえ」とは、切り株から出る萌芽のことである。幹を切られて元の形に戻ることはできないけれども、風や雨に耐え、大丈夫だと思えたときにやがて新しい芽が出る。元の形には戻れないけれども、新たな形でしっかりと生きていこうと、小さくとも力強いいのちの芽を空に向かって伸ばすのである。

人生は喪失の連続である。一人っ子の家に弟や

妹が生まれれば、最初の子は兄や姉となり、成長すれば子は大人になり、結婚をすれば恋人は夫や妻になり、妻が子を産めば、夫は父に妻は母になってゆく。役割の喪失だけではない。身体の一部を失うこともあれば、自分のいのちの一部と思うほどに愛している存在を喪うこともある。長く大切にしてきた夢や希望を事故や病気、会社の倒産などで諦めねばならなくなることもある。成長や進学、昇進のような良きことにも喪失はともなうのである。喪失は大きな苦しみを生じることも多いが、その喪失したことが縁となって新たに生まれ出てくるものもある。本当に苦しいときには、とても考える余裕などないかもしれないが、自己存在をまるごと受けとめられ、心がほどこけてくるときに、自らの心にも「ひこばえ」が生じつつあることに気づけることもある。

グリーンケアライブラリーの「ひこばえ」という名称には、絵本やその空間にありのままに包み込まれ、安らぎを得ていただいた方々が、自らの力で自らの心のなかに芽生えた「ひこばえ」に気づいていただく一助になりたいという願いをこめられている。開館以降、利用する方々から、実際に自己のうちの「ひこばえ」に気づいたという思いを聴かせていただくことがある。今後、より長い期間、幾度も利用していただけるようになれば、自ずと利用者が、自己の心の中の「ひこばえ」の変化に気づいていただける機会も多くなっていくことであろう。

ここまでグリーンケアライブラリー「ひこばえ」という場の三つの特徴について述べてきた。このような場の特徴や機能は、利用者の心に大きな変化をもたらす。「ひこばえ」の安心できる空間は、利用者の心をやわらげ、かなしみをほどいていく。「ひこばえ」に並ぶ絵本や書籍は、利用者のさまざまな悲しみに寄り添い、よき聴き手の役割を果たす。利用者がグリーンにかかわる絵本や書籍を読むことを通じて、本の登場人物にかつての自己を見出したり、共通する課題や痛みを抱えている存在として見つめたりするとき、自己の心の課題を解決したり、自己の心にある痛みにやさしく気づかされる。

読書のなかで悲しい結末に涙するなど、日頃、心の奥底にしまい込んでいた感情を解放するとき、不安定だった心がバランスを取り戻し、平穏な心に戻るときもある。あるいは、絵本や書籍を読むことで、自分が考えもしなかったような新たな視点や知見を得たり、現実社会のあり方と自己の内なる世界で感じていることの異なりに気づいたりして、認識を新たにすることもある。苦しさや辛さ、恐怖など狭くなっていた視界が広がると、足元に落ちている問題に落ち着いて対処できるようにもなる。これが安心と安全を心と感じさせ、自己の内側にゆっくりとした変化があるとわかることで、真に人間的な成長を実感することもあるだろう。

グリーンケアライブラリーの意義は、そんな営みのなかにある「安心」と「安全」、「ありのままの自己を、そのままに受けとめられる感覚」、「ありのままの自己の感情の表出」等を利用者にもたらしてくれる点にある。また、自分の選んだ書籍や「ひこばえ」のやわらかな空間に触れている時間は、自分で自分のグリーフをケアしているような癒しの時間、いわば「セルフグリーンケア」と呼べるような時を過ごしてもらうことにもなっているであろう。

自己のグリーフを他者と共有することは、「傷つけられるかもしれない」といった怖さ等のハードルがある。しかし、グリーンケアライブラリーは、そのハードルを無理に越えようとする必要もなく、自己のうちに抱えたグリーフを自分でやさしく受けとめる手助けが自然に行われる場なのである。この点こそ、このライブラリー開設の目的であり、最も大切な存在意義といえる。



5 おわりに ——今後に向けた三つの展望と課題

最後に、本稿のまとめとしてグリーンケアライブラリー「ひこばえ」における、今後に向けた活動の三つの展望と課題について考察する。具体的には(1)「いつでも」「誰にとっても」居場所だと思える空間づくり、(2)グリーンケアライブラリーの認知拡大、(3)拠点としてのひこばえか

ら、セルフグリーンケアへの展開、という3点の展望を挙げ、また今後の課題を示したい。

(1) 「いつでも」「誰にとっても」 居場所だと思える空間づくり

前述のとおり、コロナ禍の現在、グリーンケアライブラリー「ひこばえ」の開館は、日曜日の午後の時間帯を二つに区切り、メールで事前に予約を受け付け、それぞれの時間帯で1グループの利用に限るといった形をとっている。利用者から多く寄せられる「自分に向き合うことができた」という感想は、他者を気にすることのない空間のなかで自身の感情にゆっくりと向き合う時間がとれたことによると考えられる。これは制限のある開館での利点といえるだろう。しかしながら日常や現実から離れ、わき起こる感情をそのまま出せる場所は、現在のような困難の多い状況下でこそ重要な役割があり、意義をもつと考える。感染状況や社会情勢を鑑みながらではあるが、将来的には事前の申し込みを不要にして、心のおもむくままに訪れてもらえる居場所と空間づくりを目指したい。

またライブラリーのある「こども極楽堂」という名称のとおり、子どもたちが安心できる場所をつくることも活動のなかでは重要であると考えられる。特に家庭や学校で居場所のない子どもたちには、自分の存在がそのまま認められ、いつでもしっかりと見守られているという安心感を得られ、つながりを感じられる「居場所」づくりをしていく必要がある。そのためにも、ひこばえの開館曜日や時間を増やすことが欠かせない。地域の子どもたちが気軽に立ち寄ることもできるようになることが望ましい。

いずれも、グリーフを抱えた人をサポートするための、さらなる資器材の拡充や運営にかかわる人的体制の強化(スタッフの拡充、研修体制の確立)等、内部体制(運営体制)の強化を行ったうえでの議論といえるだろう。「ひこばえ」の根を広げる意味でも、人材の育成と運営体制の強化は欠かせない。それらを進めることで、予約の要らない、もしくは予約が重ならず利用できるくらい多くの開館日を運営できる仕組みづくりが可能

となり、利用者にとって、より身近な居場所であると感じてもらえるようになって考えている。

(2) グリーフケアライブラリーの認知拡大

昨今、「グリーフケア」という言葉は浸透してきたが、書籍を媒介としたグリーフケアやサポート、グリーフワークに特化した場は見られない。1年間の開館状況を見てきただけであるが、すでにこうした場を必要としている人が大勢いると感じている。グリーフケアライブラリーに関する講習会や研修会を開催し、絵本等の書籍を通じたグリーフケアやワークについて学べる機会をつくり、対話ではなく、「場によるグリーフケア」の可能性を示していけたらと考える。同時に、ホームページやSNSで「ひこばえ」の情報を発信することも、グリーフケアライブラリーという場の認知拡大につながるであろう。

「ひこばえ」をモデルケースとして、将来的には多くの場所で、書籍を用いたグリーフケアの場が増えてゆくことが願わしい。また、地域の多様な人たちが利用し、安らぎを得てもらえる居場所としても認知されることを目指したい。

(3) グリーフケアの拠点としてのライブラリーから、セルフグリーフケアへの展開

「ひこばえ」には、さまざまなグリーフに対応する絵本が収められており、開設当初400冊ほどだった蔵書は、寄贈によって現在800冊超となっている。来館者は自分のグリーフに寄り添う絵本を選ぶことが可能である。しかしながら、おおよそその内容や種別の把握はなされているものの、それぞれの絵本がどのようなグリーフに対応しているかを分類し、目録化していくような作業はまだ完了していない。来館者にとって選びやすく、またスタッフの案内においても、よりの確で容易に必要なことをお伝えしていけるようになるためにも、絵本を中心とした書籍の分類作業を進めていくことが必須であると考えている。さらに、絵本や書籍の概要をまとめ分類した情報は、ホームページやSNSで発信することも可能になるであろう。

グリーフケアの拠点としてのライブラリー「ひこばえ」からグリーフに関する良書の紹介や発信を行うことで、グリーフを抱えた個人が、その絵本や書籍の情報を利用し、必要な絵本や書籍を家庭内で手に取ってもらうこともできるようになる。これは、いわばグリーフを抱えている個人がセルフグリーフケアを家庭で行う機会にもなるであろう。心の痛みを分かちあう場に出ていけないくらい、傷ついたり、苦しんでいる人にとっては、「ひこばえ」からの情報発信が、極めて重要なグリーフサポートの一つになるであろう。

以上、はなはだ簡略ではあるが、響和国が考えているグリーフケアライブラリー「ひこばえ」の今後の展望と課題を述べた。グリーフケアライブラリー「ひこばえ」という場づくりと、絵本を中心とした書籍を用いたグリーフケアの可能性の模索は、まだはじまったばかりのものであるが、確かな手ごたえを感じている。今後も引き続き、日本におけるグリーフケアライブラリーのパイオニアとして、かなしみに寄り添う絵本や書籍を用いたグリーフケアの手法の提示と、かなしみをほどこいていく居場所の価値を示していきたい。

<注>

- 1) 「グリーフ (grief)」とは、大切な人との死別をはじめ、愛着を感じる存在や環境、自己の役割や身体機能などを喪失した後に起きる、情緒的・身体的・心理社会的反応、および、その影響を受けている期間を意味する。その反応の内容は、悲しみの他にも、怒りや過活動、無感覚など多種多様である。また、回復のプロセスも人それぞれに異なる。このように人によってグリーフの反応や期間等が異なるのは、グリーフが指紋のように異なる「愛情」を根としていることによる。ここに紹介するように、グリーフの影響から文章を読み進めることができなくなることや、認知機能が一時的に低下するという反応があることも知られている。
- 2) 泉順子「フィクションが物語るビプリオセラピーの薦め」(『明治大学図書館紀要』22, 2018年, p.99-106) 参照。読書中、読者の内面では「同一視と投影」「カタルシス」「洞察と統合」といった三つが起こる。「同一視と投影」とは、読者が登場人物と自己との共通点、および自己の抱えている課題と登場人物の抱えている課題の類似点を見つけたり、共鳴するなかで、自身の生き方や行動のモデルを見いだしたり、自己の課題の解決のヒントを得ることである。「カタルシス」とは、読者が物語の中の悲劇等を介して、鬱積していた感情を放出するなど、感情の解放を体験することである。「洞察

と統合」とは、読者は読者に新たな考えや見えなかった物事の側面を見つめさせるため、読者に自己を見つめ直させ、世の中のあり方と自己のあり方のバランスを確認させることになる。これが読者の抱えている問題を解決に向かわせる新たな方法を得る機会を生むことになる。三つ目の「洞察と統合」に関連して、ビプリオセラピーの「SPIRIT」効果(① spirituality <スピリチュアリティ> ② perception <認知> ③ insight <洞察> ④ relevance <関連性> ⑤ integration <統合性> ⑥ totality <全体性>) というものが研究者の間で提唱されている。これは、読書を通じた人格の陶冶や自己の内面と外の世界との関係性の再構築に資する効果があることを説明するものであり、読書を通じたグリーフケアを考える上でも大いに参考になる。

- 3) 日本読書療法学会会長の寺田真理子「心と身体がラクになる読書セラピー」(デイスカバー・トゥエンティワン, 2021年, p.2) には、イギリスのサセックス大学の調査結果以外にも、諸外国のビプリオセラピーの効果に関する興味深い情報が紹介されている。また、N.Tukhareli. *Healing through Books*. Lewiston Edwin Mellen P.2014,10によると、アレクサンドリア図書館の門に「魂の癒しの場所」と記されていたという。また、同書 p.28 には、古代ギリシャの都市テーバイの図書館の扉に「魂の癒しの場所」と記されていたとある。
- 4) ここであえて「悲しみ」や「哀しみ」と表記せず、「愛しみ」と表現した理由は、喪失の痛みやかなしみの根底には必ず「愛情」があることを示そうと考えたからである。「かなしみ」は、消し去るべき病気のもともなければ、生活の不具合でもない。時には、他者へのやさしさや慈しみの源泉にもなり得るものである。グリーフを経験した人々が形づくっていった「ひこばえ」の空間は、まさに「愛しみの結晶」と呼ぶにふさわしいものであろう。
- 5) 写経や写仏については、こども極楽堂1階の仏画の前にて、いつでもできるように準備してある。希望があれば、写経や写仏をした用紙をもとに亡き大切な人の供養を光臨院にて行うこともできる。

<参考文献等>

- 本郷由美子『虹とひまわりの娘』講談社, 2003, 231p.
- 木村有里「学校での危機介入を支援するために—『子供のグリーフケア』に役立つブックリストを作る」『学校危機とメンタルケア』1, 2009, p.35-48.
- 坂口幸弘『悲嘆学入門—死別の悲しみを学ぶ』昭和堂, 2010, 213p.
- 倉倉剛『絵本セラピーのすすめ—絵本の新しい世界を拓く』あいり出版社, 2015, 151p.
- 吉水岳彦「仏教者による生活困窮者支援—戦後の浅草山谷地域を中心に」『日本仏教会年報』第81号, 2015, p.78-108.
- 松田智子「絵本から学ぶグリーフプロセス」『奈良学園大学紀要』9, 2018, p.147-156.
- 泉順子「フィクションが物語るビプリオセラピーの薦め」『明治大学図書館紀要』22, 2018, p.99-106.
- 竹内整一「「かなしみ」の哲学—日本精神史の源をさぐる」日本放送出版協会, 2009, 237p.
- 「喪失と悲嘆に寄り添う部屋/台東区にライブラリー「ひこ

- ばえ』/付属池田小事件の遺族開設」朝日新聞 2021年2月26日夕刊(東京本社, 最終版)
- 「亡き娘の思い胸に母, 悲しみに寄り添う図書室開設」(日本経済新聞 2021年6月5日 WEB版)
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUF28BN20Y1A420C2000000/>
- 「付属池田小事件 20年 心に寄り添う, 優希と69歩目/救われた時のように/受刑者とも向き合う」朝日新聞 2021年6月7日朝刊
- 「娘の“最後の68歩”『お母さん ちゃんと受け止めたからね』NHK WEB特集 2021年8月31日, 2021年6月25日(最終参照 2021-12-05)
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210625/k10013099241000.html>
- 「事件から20年, 愛する子供を奪われた親はどう生きてきたか」Hanako ママ web 2021年8月3日
<https://hanakomama.jp/column/123648/>
- 「愛娘との突然の別れを経験した本郷由美子さん。他者に寄り添い, 支え, 支えられて生きる」家庭画報.com 2021年8月30日, (最終参照 2021-11-15)
<https://www.kateigaho.com/home/115241/>
- 「開催間近! 昔懐かしい自転車の紙芝居イベントグリーフケアライブラリー「ひこばえ」にて」Hanako ママ web 2121年10月26日
<https://hanakomama.jp/odekake/129964/>
- 日本読書療法学会ホームページ
http://www.bibliotherapy.jp/jpn_whatbibliotherapy.html
(2021.12.10 受理)

現代の図書館 投稿規定

2007年4月 現代の図書館編集委員会
2013年6月 改訂

- 1 本誌は日本図書館協会が発行する季刊誌であり、当協会の会員は投稿することができる。
- 2 本誌は、広く世界へ目を向け、国内外における図書館や情報提供機関等が直面する実践的課題を踏まえ、図書館および情報提供機関等の発展に貢献する論考を掲載する理論誌である。理論誌という性格から、原稿には、記述にあたって可能な限りデータや客観的事実を用いることを求める。また原則としてエッセーや感想文的な原稿は掲載しない。
- 3 投稿原稿は必ず未発表のものとする。原稿分量は、図・表・写真等を含め刷り上り5~6頁程度(1頁=22字×84行)が望ましい。
- 4 原稿の執筆は、「『現代の図書館』執筆要綱」に従って行う。
- 5 投稿は、下記にて随時受付ける。
[送付先] 〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
公益社団法人日本図書館協会 現代の図書館編集委員会
E-mail: gendai@jla.or.jp
- 6 送付する原稿の形式は、原則として電子テキスト(テキストファイル形式、またはMS-WORD形式)とする。電子テキストが難しい場合は、印刷原稿を郵送してもよい。原稿は、掲載の可否に関わらず、原則として返却しない。
- 7 投稿原稿の掲載の可否は、編集委員会の審議を経て決定する。また、その際に、原稿の一部修正や書き直しを求めることがある。なお、査読の後、掲載が決定した日を原稿受理の年月日とする。
- 8 著者校正は初校のみとする。その際に、原則として大幅な修正や追加は認めない。
- 9 掲載論文には、掲載誌1部と論文の抜刷20部を送付する。
- 10 本誌に掲載される論文の著作権は日本図書館協会に帰属する。著作権の扱いの詳細に関しては編集委員会に問い合わせること。

現代の図書館原稿執筆要綱

2007年4月 現代の図書館編集委員会

- 1 原稿は横書きとし、提出後再訂正の必要がないよう字句、内容を明確に記した完全原稿とする。
- 2 原稿には題名及びその英訳、キーワード、著者の姓名のローマ字書きを添える。
- 3 文体は簡潔な文章口語体とする。漢字は原則として常用漢字を用い、新かなづかいによる。書誌学的な理由などから、特に旧字体を使用する必要がある時は、その旨を

記す。

- 4 書出しと改行は、行頭より1文字を下げる。翻訳の場合の改行は、原文に準ずる。
- 5 句読点(。、)及びカッコ(〔 〕)、引用符(“ ”)等は明確に付し、いずれも全角(原稿用紙1こま)をあてる。
- 6 数字は、引用文及び漢語の一部として漢数字が習慣的となっている場合を除き、原則としてアラビア数字を用い、半角(原稿用紙1こまに2字)をあてる。
【アラビア数字の例】5冊, 50万円, 5分の1(あるいは1/5), 第5表, 第55条…
【漢字を用いる例】一般に、一時的に、一見して、第三者, 数百人…
- 7 本文中の書名、誌名は「」でつづみ、雑誌論文名、記事名は「」でつづむ。欧文書名及び誌名はイタリック体とする。
- 8 文中の引用文は“ ”の中に入れ、また引用文が長い場合は改行し、本文より2文字上げて記す。
- 9 外国語は、原則として慣用呼称をカタカナ書きにし、必要に応じて人名、地名、新訳の事項名等の原綴を()内に記す。ただし同一語の原綴は、その初出の語のみ付す。ローマ字の小文字は、半角(原稿用紙1こまに2字)とする。
- 10 文中ゴシック体(太字体)にするもの下には____線を、欧文でイタリック体(斜体)にするもの下には_____線をひく。
- 11 引用文献、注は脚注とせず、本文中の該当箇所の右肩に小さく1), 2), 3)のごとく示し、別紙にその順序に配列して一覽で示す。
- 12 文献の記載方法は『科学技術情報流通技術基準 SIST02 参照文献の書き方』(入手先 http://sist-jst.jp/handbook/sist02_2007/sist02_m.htm) 及び『SIST02 suppl. 参照文献の書き方(補遺) 電子参照文献の書き方』(入手先 http://www.jst.go.jp/SIST/handbook/sist02sup/sist02sup_m.htm) に準拠する。
【例】
R.P.ドーア. 江戸時代の教育. 東京, 岩波書店, 1970, 321p.
岩瀬敏生. “A 図書館とはなにか”. 図書館ハンドブック, 第5版. 東京, 日本図書館協会, 1990, p.1-8.
小田泰正. レファレンス・ワークか読者援助か. 図書館雑誌, Vol.59, No.9, 1965, p.396-399.
日本図書館協会. “図書館イベントカレンダー2006”. 日本図書館協会. (オンライン), 入手先 (<http://www.jla.or.jp/calendar.html>), (参照 2006-02-14).
- 13 図, 表, 写真等は別紙とし、これに図版番号とそのタイトルを必ず記す。その挿入位置は原稿本文中に指定する。

現代の図書館 第59巻 第4号(通巻240号)

2021年12月24日発行 定価: 1,430円(本体価格1,300円)

編集: 日本図書館協会現代の図書館編集委員会

発行: 公益社団法人日本図書館協会 〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 ☎03(3523)0811(代) 振替: 00100-1-9375 (出版販売専用)

印刷: 神谷印刷株式会社

Libraries Today Vol.59 No.4

© 2021 Japan Library Association *本誌からの無断転載を禁じます

ISSN0016-6332

本文は中性紙を使用しています